

Post COVID-19の キャリア教育の新たな展開

早稲田大学大学院教育学研究科
教授

三村隆男

COVID-19が教育に もたらしたもの

COVID-19がもたらしたものと
して世界中に広がった「Cap for Careers
の動向に注目したい。特に3月、英国
で行われた取り組みは、YouTube
にも動画があり、多くの視聴者を感じ
動させた。私にとってこの動きは、単
に医療業務従事者への賞賛や感謝にと
どまらず、医療というキャリアで果た
された役割に対する畏敬の念と捉える
ことができる。この場面でキャリアそ
のものに対する捉えが大きく変化する
のを感じた。

学校教育（ここでは、小学校、中学校、
高等学校を指す）におけるCOVID

19の影響は計り知れない。まず3カ
月近くの学校の休業、その間のオンラ
イン授業の浸透が生んだ教育格差、そ
して「主体的・対話的で、深い学び」と
されるアクティブ・ラーニングの自粛
などが、マスクなどで指摘されてい
る。また、教師が配膳した品数が限定
された給食を、分散登校で半数になっ
た生徒たちが席を離して無言で黙々と
食べている中学校の様子など、新たな
日常の異様な様子も報告されている。

職場体験、就業体験などの体験活動
を中核としているキャリア教育である
が、令和2年度は多くの学校で、職場
体験は中止または大幅に縮小され、職
業人を招聘した授業も中止の学校が多
く、重要な職業理解の機会に赤信号が
ともっている。自粛に伴う経済活動の
停滞で業績が悪化した事業所側の事情
もあり、文部科学省の「平成30年度職
場体験・インターンシップ実施状況等
結果（概要）」（文部科学省）で示され
た中学校職場体験実施率97・7%、高
等学校就業体験（インターンシップ）
実施率84・9%は、令和2年度では大
幅な減少が予想され、その回復にはだ
いぶ時間かかると想定される。

不確定の要素が多く存在する中で、
テーマに迫ることには困難を伴うが、
ここでは、2020年度から新たに小
学校で開始される学習指導要領に基
き、Post COVID-19の中で構築
される学びとキャリア教育の在り方に
ついて考えていきたい。

中央教育審議会答申と学習指導要領

学習指導要領におけるキャリア教育
について言えば、小学校、中学校そ
して高等学校の12年間を通し、学校
教育において正式に認知されたのは、
2017年に告示された小学校及び中
学校学習指導要領の告示においてであ
る。すでに前回の2009年の告示で
キャリア教育が明記された高等学校学
習指導要領とつながったのである。学
習指導要領の告示前に、その方針を示
す2016年の中央教育審議会答申
（以下、2016年答申）では、「子供
たちに将来、社会や職業が必要となる
資質・能力を育むためには、学校で学
ぶことと社会との接続を意識し、一人
一人の社会的・職業的自立に向けて必
要な基盤となる資質・能力を育み、キャ
リア発達を促すキャリア教育の視点も
重要である」とキャリア教育の重要性
を指摘している。この中で「学校で学
ぶことと社会の接続を意識して」に注
目し、さらに答申で新たに登場した「主
体的・対話的で、深い学び」における、
幅広い意味をもつ「深い学び」を追究
する。

創造したりすることに向かう「学び」と「深い学び」を特定している。

キャリア教育における体験的な活動が難しくなる中、通常の各教科等の授業を通して「見方・考え方」を働かせ、知識を相互に関連付け、様々な方法を通して思いや考えを創造する「深い学び」を社会とつなぐ方策について米国カリフォルニア州で行われている「Linked Learning」(以下、LL)の実践から学ぶこととする。

Linked Learning 「つながる学び」の実践

米国では2006年に連邦政府が改正したカール・D・パーキンス法により登場したキャリア・テクニカル教育(以下、CTE)の改善策として、LLは、米国カリフォルニア州に登場する。CTEが拡大する中で「中等後教育の進学に特化した教育活動をする」ことで、職業的な知識や生きたための技能を身に付けず生徒を卒業させてしまっている「CTEと中等後教育への進学教育を分けて行うことで、暗黙のうちに格差を助長している」との批判があった。

まず、CTEであるが、カリフォルニア州の場合、同州の職業を15業種(セクター)に分け、それぞれの下位に57の職業分野(パスウェイ)を設置している。このパスウェイが学校の教科の学びを「つなぐ」のである。LLには新たなコンセプトとして、college and

career readiness 及びequityが含まれた。前者は、進学が就職が指導が二分されている批判に対し、「誰もが、中等後教育を受け、仕事に就く準備ができていく」というもので、著しく高度化していく職業では、学校で学んだ知識や技能では太刀打ちができなくなるため、就業したのちにさらに学びに入り、仕事に還元できる人材を育成するのである。後者は、教育格差に対峙するため、教育の機会をあらゆる場面で公平、公正が必要との考え方である。

LLが開始されてから7年後、多様な教育効果について報告書が発行された¹⁾。調査は認証されたLLプログラムのLLプログラムの生徒2万831人、及び伝統的な高校教育を受けた生徒2万1646人で合計4万7538人を対象に実施された。結果は、特に不利益を被りやすいサブ・グループ(成績不振者、第二言語としての英語学習者、アフリカ系米国人、ラテン系米国人、女子など)において、LLは中退、単位の取得、卒業率などで他のグループと比較し有意に好結果をもたらした(表1)。equityが言質されていると言える。

米国のLL実践から今後のわが国のキャリア教育の在り方を考える

LLの代表的なものにMedical (Health Care) パスウェイがある。そこで生徒は、教科と連携した高度な医

療技術に触れる。多くの高校には、地域の寄付によって購入したアナトマイ・ジ・テーブルが設置され、高校生が理科や体育とつながる解剖学を学ぶ。設置されるパスウェイは、地域で求められる人材に影響を受けている。こうし

たパスウェイで育った人材がCOVID-19の渦中で医療業務従事者として献身的に地域に尽くしたのである。「つながる学び」の中核に職業を位置付け教科学習をすることは、すなわち、その専門性を社会でどのように貢献するかを学ぶことにつながるのである。話題を医療に限定したが、COVID-19は今後、医療業務や介護業務従事者の育成が不可欠であることを示した。

「やりたいこと(仕事)を探す」キャリア教育はすでに終焉を迎えたようである。今後は、社会が自分に対して何を求めているか、そのために自分ができるように応えることができるかを模索するキャリア教育を「深い学び」を通して実現する時代が訪れたのではないだろうか。そうでなければ、次のパンデミックに世界は持ちこたえられないであろう。

1) SRL international (2016), *Taking Stock of the California Linked Learning District Initiative Seventh-Year Evaluation Report*, Revised August 2018 to reflect updated graduation data and analysis. Retrieved from https://www.srl.com/sites/default/files/publications/sri_year_7_linked_learning_evaluation_report_0.pdf

表1 サブ・グループにおける統計的な有意及び有意傾向の検討

	全体	成績不振者	第二言語として英語学習者	アフリカ系アメリカ人	ラテン系アメリカ人	女子
学校生活への関与						
中退*	▲	▲	▲	○	▲	▲
進学における成功						
単位の取得	▲	▲	▲	▲	▲	▲
卒業(率)	▲	▲	○	○	▲	▲
大学進学への準備						
大学入学に求められるものの準備	▲	▲	▲	△	▲	▲
大学入学に求められるものの完遂	○	算出できず	○	○	○	○
大学入学のための GPA	○	△	○	○	△	○
中等後教育への入学	○	○	▽	○	○	○
4年制大学への入学	○	▲	△	▲	○	○
中等後教育における継続**	○	○	算出できず	○	○	○

* 中退の肯定的結果とは中退率の低下を意味する。

** 中等後教育で、1年から2年への進級を果たした。

▲ 統計的に有意に肯定的な結果を示した。p < .05

△ どちらかといえは有意に肯定的な結果を示した。p < .10

○ 変化なし。

▽ どちらかといえは有意に否定的な結果を示した。p < .10